Community みぶの

まちづくり協議会広報誌

発行 2009(平成 21)年 8 月 1 日

第 50 号

壬生野地域まちづくり協議会
〒519-1424 伊賀市川東 4539 番地の 4
壬生野地区市民センター内
Tel：(45)8900 ・ Fax：(45)8901
E-mail tokimeki@ict.ne.jp
URL http://www.mibuno.net

「ｺﾐｭﾆﾃｨ壬生野」第50号発行記念号

第５０号の発行にあたり、壬生野地域まちづくり協議会の基本理念について、簡単にまとめましたので、まちづくり活動への再認識とご理解ご協力をいただきたく存じます。

コミュニティづくりの主役は、私たち住民です。

さまざまな地域課題を解決していくためには、地域のあらゆる人たちが一体となり、意見を出し合い共に協力して活動を展開していくことが大切です。この活動を実践する組織として、自治会や地域の各種団体を中心とした『壬生野地域まちづくり協議会』を結成し、地域の課題を議論し住民が主体となって『地域まちづくり』を策定・実行するものです。

その主な役割は、地域の課題となる住民のニーズを行政へ反映させる、地域単位のまちづくり活動（地域福祉・環境美化・地域防災など）を展開する、行政からの業務委託（公共施設の維持管理など）を実施するなどがあげられます。

壬生野地域まちづくり協議会の方針

『ふるさとの継承と新たな住民自治の創造』という方針のもとに、「壬生野地域のよき文化・伝統を継承しながら、住民が主体となり、より暮らしやすい地域を創造するまちづくり」を目指して活動しています。壬生野地域を広域的コミュニティ範域と捉え、「自分たちのまちは、自分たちでつくる」という、市民が主役の地域コミュニティの創造を目標に掲げ、様々な地域課題を解決し、地域住民が一体となった『住みよいまちづくり』を実践することを目的としています。

❶ みんなが動かす地域社会

自治会活動による交流を一層深め、更に広い範囲での住民自治活動を実践し、効率的で地域住民のニーズに沿った事業を推進する為、懇談会やまちづくり事業の啓発、自治会との連携に取り組んでいきましょう。

❷ だれもが幸せに、自分らしく輝いて生きる

人権はすべての人に保障される最も重要な権利です。肌で感じる人権意識を培っていきましょう。

❸ ふれあい、ささえあう、健康と福祉のまちづくり

全ての住民が安心して生活し、より良い生涯を過ごすため、健康づくりや子育て支援等地域が支える総合的な福祉支援を推進していきましょう。

❹ 生活・環境の再生（田園とほたるとひばりの里、壬生野）

“こころ”豊かで “人”と“自然”が共生した“ふるさと”を私たち自らが形成していくとともにコミュニティの機能を再生し、住民相互の自主的な防災・防犯活動を実践していきましょう。

❺ ぬくもりのある中で人を育み、心おどる壬生野の文化を創る

自由な時間の増加や心の豊かさを求め、生涯学習や文化、スポーツへの参加意欲を高かめ、家庭と学校そして地域が一体となって取り組み、地域の歴史や文化を一人ひとりが再確認し、それぞれの分野でいきがいを見い出していきましょう。

❻ 人、自然とふれあい、活力のあるまちづくり

壬生野地域は、今も農林業を基幹産業とした土地柄ですが、新興住宅地における青空市場の開催や農業交流等を通した活力のあるまちづくりを展開し、多様な地域資源を活かした魅力ある地域を形成していきましょう。

教育文化専門委員会からの報告

苔玉づくり

７月 11 日(土)　当委員会が募集しました「苔玉づくり教室」には、23 名という大勢のご参加をいただき盛大に開催できました。

前川講師には愛らしい草花をはじめとして材料を、また役員が野山から苔を集めて持ち寄り、指導を受けながら各自が思い思いの形、大きさに作り上げました。

出来上がった苔玉は、どれもこれも自信作で、互いに品評し合ったのち大切に持ち帰りました。

パソコン教室

７月４日(土)からスタートした当教室は、９名の応募をいただきました。基本から応用編に至る本格的学習を経て２級レベルを目指して取り組んでいます。

飛び入り参加も歓迎しますので様子を見に来てください。毎週土曜日午後１時 30 分から壬生野地区市民センターで行っています。

みんなで　つくろう　安心のまち　･･･　青少年の非行防止に努めましょう。

夏休みに入り青少年たちが夜間に外出する機会も増え、誘惑され非行にはしったり、また、薬物乱用に出くわしたりします。さらには、携帯電話・インターネットの普及に伴い、犯罪被害にかかったりするおそれが十分あります。家庭においてはもちろんのこと、地域においても青少年に対する挨拶等のかけ声運動など、積極的に青少年非行に至る有害環境の浄化に努めましょう。

初盆家のご案内について

壬生野、柘植、西柘植地区における初盆を迎えられる御家について、
壬生野地区市民センターに名簿を備えてありますので閲覧等ご利用下さい。
ご先祖様のご冥福をお祈り申し上げます。

編　集　後　記

今年は梅雨明けが遅れているようです。小紙がご家庭に届く頃には、真っ青な空に太陽がギラギラ輝く夏本番になっていればいいのですが。いずれにせよ、暑さ厳しきおりお身体大切にお過ごしください。

さて、この小紙「コミュニティ壬生野」は今回、平成16年1月に創刊以来、
通算５０号を迎えることが出来ました。今後とも親しまれる小紙として頑張ります。

◇◇◇◇ ご意見・お問い合わせ・投稿は、下記までお寄せ下さい。◇◇◇◇

壬生野地域まちづくり協議会広聴広報委員会　　TEL：45－8900

介護の苦労を地域が知り地域の人が助けるつながりが必要

7 月 10 日(金) 2009 年度いがまち入権センター第 1 回解放講座が開催されました。今回は、「ぼけても心は生きている～認知症の理解と人権～」と題して社団法人「認知症の人と家族の会」の高見国生さんからご講演頂きましたのでその一部をかいつまんで紹介します。

高見さんは、福井地震でご家族を失くし、伯母（父の姉）に育てられ、28～36 才にかけてその伯母を介護されました。その経験から「ぼけ老人をかかえる家族の会」という会を設立されました。

会の名称にある「ぼけ」、「かかえる」は高齢者を尊敬していないような言葉であると新聞に投稿されたこともあったそうです。

「痴呆」という言葉では、中身まですっかりアホになったようで逆におかしいと感じ、親しみを込めて「ぼけ」という言葉を使った。また、会員は会費まで払って少しでも良い介護を受けさせたいと考えている。決して高齢者をさげすんだりする会ではありません。「ぼけ」という言葉は、状態を表す言葉で、言葉自体に差別性はない。普段「寝ぼけ」や「ぼけとつっこみ」などに使われています。しかし、「ぼけだけにはなりたくない。」という意識には、認知症の人を自分より下に見ているような差別の意識が潜んでいます。では、なぜ、「ぼけだけにはなりたくない。」のか。ぼけると何もかも分からなくなってしまう、また、家族に迷惑をかけると思い込んでいるのではないでしょうか。「もの忘れ」とは、体験の一部を忘れること、「認知症」とは、そのものすべてを忘れることです。例えば、「昨日の解放講座の講師の人、何ていう人やったっけ?」というのは、「物忘れ」。「そんなの聞きに行っていません。」というのが「認知症」ということです。

認知症の人の心の中は、何も感じないという状態ではありません。例えば、時間や場所がわからなくなり、数十年前の状態で暮らしていることがあると考えると、つじつまがあうのではないでしょうか。夕方になると、荷物をまとめて帰ろうとする行為は、その場所が自分の家だと思っていないから、実家に帰ろうとする。また、頭の中が出産育児よりも古い時代になっていれば、息子、娘の顔さえわからないということになります。

「良い介護者は、良い役者になれ。」と昔は言ったものです。認知症患者は、悪気があってやっているわけではありません。怒らず、否定せず、今、どの年代で生きているかを考えてやることです。

老々介護、認知介護等、男性の介護者が約 30%と増加してきています。男性の場合、一生懸命介護するが、挫折しやすい傾向にあります。介護心中などはこの 10 年間で 350 件発生しており、毎月約 3 件のペースで発生していることになります。この介護心中は男性介護者に多いのです。

このようなことが理屈としてわかっても、家庭は楽にならない。福祉行政が充実しないと家庭だけでは無理なこともあるのが事実です。介護者の苦労を地域が知るべきで、また、家族が認知症を隠さない。家族が認めなければ地域の人は助けることができません。仲間を作り、地域とつながることが重要ではないでしょうか。

（文責：人権・同和委員長／山本眞司）

産業交流専門委員会からの報告

産業交流専門委員会では、7月18日ヤマギシにて見学学習をしました。養鶏・乳牛飼育・養豚の3部門の見学とそれぞれの担当の方の飼育に関する考え方や循環農法のお話を聞きました。

同じ飼育場で働くもの同士の信頼関係、人間関係を大切にしながら飼育に専念しているお話は、私たちまちづくりにも通じるものがあると思いました。

我がまち人物紹介

日中交流にかける男

7 月 22 日(木)　市内のホテルで内保伊賀市長をはじめ 40 名参加の訪日歓迎レセプションが開かれました。これは、さかのぼること 16 年前の 1993 年から始まった県立上野農業高校(現：白鳳高校)との交流先である中国江蘇省の江蘇農林職業技術学院（以下、学院）の尹(イン)学院長を団長に７名の学術交流訪問団が来日されたのです。このことに山畑区で畜産業を営んでいる中林正悦さんが中心的に関わっています。

彼は、2003 年に学院最初の海外客員名誉教授として迎えられ、それ以来年に３～４回講義や学院行事のため訪中しているそうです。また、ご本人の発案で毎年 1 回在中日系企業の求人担当者を交えての「日本語弁論大会」を開催しています。

今年、4 月 2 日から 5 日に渡り正悦さんと同郷の同年有志が「いっぺん、正悦さんの話している学院へ行ってみようやないか」と話しがまとまり「第 6 回日本語弁論大会」に参加のため訪中しました。

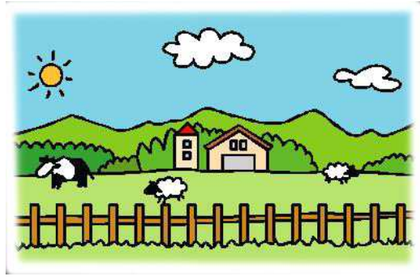
学院は、上海からバスで約４時間ほど北西に位置する句容市にあります。途中、真っ黄色一面に広がった菜の花の農村風景に目を奪われ、また生徒数 12,435 名、教員 697 名と想像を超えた規模と立派な施設、学院にびっくりしました。将来の若者にかける中国の力の入れようが伺えます。

その学院の中で日本語学科の生徒は約 300 名とのことで、4 月 3 日の弁論大会では予選を勝ち抜いた 15 名が流暢な（中にはトチった人もいましたが････）日本語で家族のこと、両親のこと、自分の夢、勉強のこと、日本の印象などについて熱弁をふるってくれました。一人 3 分間という限られた時間の中で自分の主張をまとめることは大変だろうと思いますが、発表者全員が眼を輝かせ一生懸命語りかけていたことに大変感銘を受けました。

筆者も審査員の一人に加わり、発表後「アナタノ　ショウライノ　ユメハ　ナニデスカ」と逆に変なイントネーションの質問になっていたことが、恥ずかしくもなつかしく思い出されます。

壬生野の地に、地道ながら国際交流と日中友好に努力され頑張っている正悦さんがいることを地域の皆様にご紹介し、拍手を送りたいと思います。

（投稿：中林正則）



また、鶏の性質を考慮した飼育方法や鶏糞は養鶏場の中で醗酵し肥料にすぐできる仕組みには驚きました。

乳牛のところでは、乳牛と命の学習を見学者に分かりやすく理解できるよう工夫されていました。

養豚のところでは、子育てをする母豚の様子を見学しました。一度に12頭平均の子どもを産み、何頭もの母豚が育てている様子を見学しました。豚は清潔で排便の場所、寝室の場所などを区別しているというお話もありました。